トマス・アクィナス『定期討論集 悪について』第16問「悪霊について」第1項 試訳

石田 隆太

1 はじめに

本稿では、西洋中世の思想家トマス・アクィナス（c. 1225–74）が悪魔論について体系的に論じた箇所の一つである『定期討論集 悪について』第16問「悪霊について」の全訳を目指す試みの一環として、その第1項の試訳を提示する[1]。訳者は以前、未邦訳文献だったトマスの『定期討論集 霊的被造物について』の全訳を本誌第15号（2014年）にて開始し、本誌以外にも筑波大学の複数の学内誌に続稿を寄せて、ついに本誌第19号（2018年）にて完了するにいたった[2]。今度は『悪について』第16問「悪霊について」を対象にして同様のプロジェクトを開始することにしたい[3]。

本稿で訳出する第1項でトマスは、悪霊には自身と本性的に合一した身体があるのかどうかを問題にする。『霊的被造物について』第5項でもトマスは霊的被造物が身体と合一する可能性を問題にしているが[4]、より関連性の高いのは同書第7項である。そこ

---

[1] 『悪について』の翻訳などに関する書誌情報については、次を見よ：石田隆太、「トマス・アクィナスの「悪の研究」――『定期討論集　悪について』第1問題」、『古典古代学』、第14号、2022年、17–18頁。

[2] 『霊的被造物について』の訳稿の書誌情報については、次を見よ：石田隆太、「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第十一項　試訳」、『宗教学・比較思想学論集』、第19号、2018年、57頁。

[3] 『悪について』の日本語による全訳は存在しないが、部分的には次の翻訳が存在する：金子隆徳、「抄訳　トマス・アクィナス「正規討論集　悪について」（その1）」、『久留米信愛女学院短期大学研究紀要』第、17号、1994年、116–26頁（第1問第1項～第3項および第2問第2項～第3項における主文のみ）；松根伸治、「トマス・アクィナス『悪について』第8問第1項・七つの罪源（翻訳）」、『アカデミア』人文・自然科学編（南山大学）、第6号、2013年、213–28頁；同、「トマス・アクィナス『悪について』第8問第2～4項・高慢（翻訳）」、『アカデミア』人文・自然科学編、第8号、2014年、165–84頁；同、「トマス・アクィナス『悪について』第9問・虚栄（翻訳）」、『アカデミア』人文・自然科学編、第12号、2016年、261–77頁；同、「トマス・アクィナス『悪について』第10問・嫉妬（翻訳）」、『アカデミア』人文・自然科学編、第14号、2017年、221–40頁；同、「トマス・アクィナス『悪について』第11問・倦怠（翻訳）」、『アカデミア』人文・自然科学編、第19号、2020年、171–88頁；同、「トマス・アクィナス『悪について』第12問・怒り（翻訳）」、『アカデミア』人文・自然科学編、第24号、2022年、315–40頁；同、「トマス・アクィナス『悪について』第13問・強欲（翻訳）」、『アカデミア』人文・自然科学編、第25号、2023年、307–29頁。また第1問第3項の主文については稲垣良典による翻訳も存在する（『トマス・アクィナス』、講談社、1999年、421–25頁）。

[4] 石田隆太、「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第五項　試訳」、『宗教学・比較思想学論集』、第17号、2016年、105–27頁。

で彼は霊的実体が空気の身体と合一するかを論じ、霊的実体はいかなる仕方でも空気の身体と合一できないという結論を提示した[5]。『悪について』第 16 問第 1 項も基本的には同様であり、主文の最後でトマスは、「かくして私たちは、悪霊には自身と本性的に合一した身体はないと主張する」と述べるにいたる。しかしながら興味深いことに、第 1 項の末尾には反対異論解答が付されており、悪霊が身体と合一する可能性そのものについては一定の留保がされているようにも読める。もちろん主文の冒頭で「悪霊に自身と本性的に合一した身体があろうとなかろうと、これはキリスト教信仰の教義にとっては大して重要ではない」と言われていることも考え合わせる必要があるだろう。いずれにしても、『悪について』の第 16 問がトマスの悪魔論を見るうえで見逃せない箇所であることが大いに期待される。より詳細な検討は後稿を期することとし、以降では訳文の提示に徹することにしたい[6]。

２ 試訳

第 16 問
悪霊について

第 1 項[7]

問題は悪霊（demon）[8]についてである。そして第一に、悪霊には自身と本性的に合一した身体（corpus）[9]があるかが問われる。そしてそうだと思われる。理由は次の通りである。アウグスティヌスが『創世記逐語注解』第 11 巻［第 13 章］で言うように、「理性的被造物の霊において、それが生きていて身体に生命を与えることそのものは善であり、その身体が悪魔そのものの霊ないし悪霊の霊のように空気の身体（corpus aereum）であれ、人間の魂のように土の身体（corpus terrenum）であれそうである」。しかるに、生命が与えられている身体は、生命を与える霊と本性的に合一している。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した空気の身体がある。

2. さらに。経験は多くの記憶から生じ、それは過去の感覚から生じるのであって、［アリストテレスの］『形而上学』冒頭［第 1 巻第 1 章 980a28–81a1］で言われる通りである。かくして経験があるところには、いつも感覚がある。そして感覚は、本性的に合

---

[5] 石田隆太、「トマス・アクィナス『定期討論集　霊的被造物について』第七項　試訳」、『古典古代学』、第 9 号、2016 年、52 頁。

[6] 訳出の底本としては次のレオ版を使用する：Sancti Thomae de Aquino, *Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita, t. 23: Quaestiones disputatae de malo*, Roma-Paris: Commissio Leonina-J. Vrin, 1982.

[7] 並行箇所：『命題集注解』第 2 巻第 8 区分第 1 項；『対異教徒大全』第 2 巻第 91 章；『定期討論集 神の能力について』第 6 問第 6 項；『定期討論集 霊的被造物について』第 5 項；『離存的実体について』第 20 章。

[8] 《demon / daemon》は目下の議論では基本的に「悪霊」、つまり悪魔を意味するものの、それだけにかぎらない場合も散見される。そうした場合には訳者の判断で「ダイモン」とした。有名な事例としてはソクラテスの言うダイモンが挙げられるだろう。

[9] 《corpus》は「物体」とも「身体」とも訳せる語である。以降では訳者の判断で両者の訳語を使い分けるが、両者の線引きを厳密に行うことが難しい場面もあることをあらかじめ断っておく。

一した身体なしにはない。というのも、感覚は身体器官の現実態だからである。しかるに、悪霊には経験がある。というのも、アウグスティヌスが『創世記逐語注解』第 2 巻［第 17 章第 37 節］で言うように、悪霊が何らかの真を認識するのはなぜかといえば、より精妙な才覚（ingenium subtilius）という点で有能だからでもあり、より熟練した経験（experientia callidior）があるからでもあり、聖なる天使たちから学んでいるからでもあるからである。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した身体がある。

3. さらに。［偽］ディオニュシオスが『神名論』第 4 章［第 23 節］で言うように、悪霊における悪とは「理不尽な狂憤（furor irrationabilis）、無分別な欲情（demens concupiscentia）、倒錯した表象（fantasia proterua）」である。しかるに、この三つは魂の感覚的部分に属しており、その部分には表象力（fantasia）、怒情的な力（irascibilis）、欲情的な力（concupiscibilis）がある。そして感覚的部分は身体なしにはない。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した身体がある。

4. さらに。下位の秩序に属する或るものが上位にいればいるほど、それは上位の秩序との結合をより大きくする。だから『原因論』［命題 19（18）］で言われるように、知性体（intelligentia）のなかには単なる知性体という下位のものがあり、またそのなかには神的な知性体という上位のものもある。そして魂のなかには獣（bruta）におけるように単なる魂であるものがあり、またそのなかには人間におけるように知性的魂であるものがある。そして物体のなかには単なる物体であるものがあり、またそのなかには魂をもつ物体（corpus animatum）がある。だから［偽］ディオニュシオスが『神名論』第 7 章［第 3 節］で言うように、「神の知恵は第一のものどもの終極を第二のものどもの始原に結合する」。しかるに、空気は土よりも高貴な物体である[10]。それゆえ、魂をもつ何らかの土の身体が存在しているのだから、ましてなおさら魂をもつ何らかの空気の身体が存在していることになる。そしてこうしたものを私たちは悪霊と呼んでいる。

5. さらに。それによって何かが［別の］何かに適合するものは、そうした事物をよりよく受け入れるものである。たとえば、もし不透明な物体が透明体（dyaphanum）[11]を媒介にして照明されるなら、透明体はより照明されうる。しかるに、人間ないし別の動物に属する土からなる物体は、空気からなる物体である生命の精気（spiritus vitales）[12]によって生命を与えられている。それゆえ、空気の物体は土の物体よりもよりよく魂をもちうる。かくして前と同じである。

6. さらに。中間は両極の本性に接している[13]。しかるに、最上位の物体、すなわち天体は、生命を分有している。というのも、それは哲学者たちによれば[14]魂をもつからである。下位の物体、すなわち土や、水、そして空気のうち下位の部分においても同様に、生命があって魂をもつ何らかの物体が存在する。それゆえ、中間の空気にも生きていて

---

[10] cf. アリストテレス『生成と消滅について』第 1 巻第 8 章（318b32–33）。
[11] cf. アリストテレス『魂について』第 2 巻第 7 章（418b4–6）。
[12] cf. 偽アウグスティヌス『霊と魂について』第 20 章、コスタ・ベン・ルカ『魂と霊の差異について』第 2 章、アルベルトゥス『霊と呼吸について』第 1 巻第 2 論考。
[13] cf. アリストテレス『自然学』第 5 巻第 1 章（224b32）、『政治学』第 4 巻第 9 章（1294b17）。
[14] cf. アリストテレス『天界について』第 2 巻第 3 章（285a29）（トマス『対異教徒大全』第 2 巻第 70 章によれば）。

魂をもつ何らかの物体が存在する[15]。しかるに、こうした物体こそ悪霊にほかならない。なぜなら、そこまでは鳥が上昇できないからである[16]。それゆえ、悪霊は自身と本性的に合一した身体をもつ生き物（animal）である。

7. さらに。神との関係づけのなかで或る被造物に内在しているものはその被造物に本性的に内在している。なぜなら、神に対する被造物の関係が被造物のなかに基礎づけられているからである。しかるに、［大］グレゴリウスが『道徳論』第 2 巻［第 3 章第 3 節］で言うように、天使の霊はたしかに私たちの物体との関係づけのなかでは霊であるが、「最高で無限界の霊との関係づけのなかでは物体である」。ダマスケヌスも［『正統信仰論』］第 2 巻［第 3 章］で言うように、天使は「私たちとの関わりでは非物体的で非質料的だと言われる。というのも、本質的に非物体的で非質料的なのは神だけであるがゆえに、神と関係づけられるものはすべて粗くて質料的なものとして見出されるからである」。それゆえ、悪霊は自身と合一した身体を本性的にもつ。というのも、悪霊は天使と同じ本性に属するからである。

8. さらに。或るものの定義に措定されるものはその或るものにとって本性的である。なぜなら、定義は事物の本性を表示するからである[17]。しかるに、身体は悪霊の定義に措定される。というのも、カルキディウスが『ティマイオス注解』［第 135 章］で言うように「悪霊は理性的動物（animal rationale）であり、不死であり、心（animus）において受動可能であり、身体においてアイテル（ethereus）である」からであり、またアプレイウスが『ソクラテスの神について』で言うように悪霊は「類において動物であり、心において受動的であり、精神（mens）において理性的であり、身体において空気であり、時間において永遠である」からである。アウグスティヌスも［アプレイウスの言葉を］『神の国』第 7 巻［正しくは第 8 巻第 16 章］で紹介している。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した身体がある。

9. さらに。自らの身体のゆえに質料的な火による刑罰の行い（actio penalis）を受け入れるものにはすべて、自身と本性的に合一した身体がある。しかるに、悪霊はこうしたものである。実際、アウグスティヌスが『神の国』第 21 巻［第 10 章第 1 節］で言うように、「火は人間や悪霊の刑罰に適用されることになる。なぜなら、悪霊にも何らかの汚れた身体（prauum corpus）があるからである」。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した身体がある。

10. さらに。或るものにその創造の始めからつねに内在しているものは、その或るものに本性的に内在している。しかるに、身体は悪霊にその創造の始めからつねに内在している。実際、アウグスティヌスが『神の国』第 9 巻［第 10 章］で言うように、「人間が身体という点で死すべきであることそのことをプロティノスが御父なる神の慈愛に属していると考えたのは、人間がこの世の生の悲惨につねには苛まれないようにするためである。悪霊の邪悪さはこうした慈愛に不適当だと判断されている。その邪悪さは、

[15] cf. アルベルトゥス『命題集注解』第 2 巻第 6 区分第 5 項 ;『気象学注解』第 1 巻第 1 論考第 8 章 ; ボナヴェントゥラ『命題集注解』第 2 巻第 6 区分疑問 1。

[16] cf. アウグスティヌス『創世記逐語注解』第 3 巻第 7 章第 10 節 ; ベーダ『ヘクサメロン』第 1 巻「創世記」第 1 章第 20 節の注解。

[17] cf. アリストテレス『分析論後書』第 2 巻第 2 章（90b3–4）、第 8 章（93b29）。

人間のように死すべき身体ではなくて永遠の身体を、受動する心の悲惨のなかで受け取った」。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した身体がある。

11. さらに。アウグスティヌスが『神の国』第 11 巻［第 23 章第 2 節］で言うように、「魂の功徳（meritum）が身体の質（qualitas）によって考慮されるべきでないことを私たちが理解するようにするために、最悪なる悪霊は空気の身体を所有する一方で、人間は、はるかにより少なく控えめな悪性に属するかぎりで悪ではあるが、今も〔原〕罪の前も泥の身体（corpus luteum）を受け取っている」。しかるに、人間には自身と本性的に合一した泥の身体がある。それゆえ、悪霊にも空気の身体がある。

12. さらに。或る実体がより完全であればあるほど、それは自らの作用に必然的に要求されるものをより多くもつ。しかるに、悪霊よりも下位の本性に属する人間の魂は、自身と本性的に合一した身体器官を自らの作用に要求されるものとしてもつ。それゆえ、悪霊は何らかの作用のために身体を必要とするので――さもなければ身体をまとわないであろう――、悪霊には自身と合一した身体があると思われる。

13. さらに。より多い善の方がより少ない善よりも善い。しかるに、身体と霊がある方が霊だけよりも善が多い。したがって、下位の本性に属する人間が身体と霊から複合されているのだから、上位の本性に属する悪霊はましてなおさらそうである。

14. さらに。身体器官から離在する能力としては知性と意志以外のどんな能力も見出されない。しかるに、或る悪霊は下位の物体に作用しており、「ヨブ記」第 1 章［第 12 節］と第 2 章［第 7 節］で明らかな通りである。その悪霊はただ意志だけでは作用しない。なぜなら、アウグスティヌスが『三位一体論』第 3 巻［第 8 章第 13 節］で言うように、物体的質料が御意のままに従順であるのは神に固有なことだからである。そこからの帰結として、その悪霊はただ知性だけでも作用しない。知性が外的なものに作用するのは意志を介してのみだからである。かくして悪霊には知性と意志以外に作用をもたらす他の能力がある。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した身体がある。

15. さらに。何かが［自分から］離れた或るものにはたらきかけることができるのは、それの力が媒介によってそのものに伝えられる場合だけである。しかるに、純粋な霊の力は物体的な媒介によって伝えられえない。なぜなら、物体は霊的な力を受けつけないからである。それゆえ、悪霊は離れた或るものにはたらきかけるのだから、それは純粋な霊ではなく物体と霊から複合された或るものだと思われる。

16. さらに。想像する力（virtus ymaginatiua）は身体器官なしにはない。しかるに、天使や悪霊には想像する力がある。というのも、アウグスティヌスが『創世記逐語注解』第 12 巻［第 22 章第 48 節］で言うように、それらは自らの霊において物体的事物の類似を未来のことごとの認識によって前もって形成するからである。それゆえ、天使や悪霊には自身と本性的に合一した身体がある。

17. さらに。アウグスティヌスが同書［第 12 巻第 23 章］で言うように、「［身体を］纏いながら魂を奪う或る霊によって魂は物体の類似を見るように促される」。しかるに、魂は物体の類似を完全に霊的な実体において見ることはできないであろう。それゆえ、魂を奪う天使ないし悪霊の霊には何らかの身体器官があり、その身体器官のなかにこうした形象（species）が保持されている。

18. さらに。質料は数に即した多数性の原因である[18]。しかるに、天使や悪霊も数において複数である。というのも、それらにはペルソナの区別（discretio personalis）が措定されるからである。それゆえ、それらには質料があり、その質料によって数に即した複数性が結果として生じる。しかるに、こうした質料は諸次元の下に含まれる質料であり、その諸次元が分離されると実体は不可分なのであり、それは［アリストテレスの］『自然学』第1巻［第3章185a32–b5］で言われる通りである[19]。そしてその場合、質料の分割によっては数的な複数性が結果として生じないことになる。それゆえ、天使や悪霊には物体的な諸次元があるのだから、それらには自身と本性的に合一した身体がある。

19. さらに。物体の固有性が見出されるところには、いつも物体も見出される。しかるに、出ていくことや動くことは物体に固有なことであり、こうしたことは悪霊にも適合する。というのも、「ヨブ記」第1章［第21節］で言われるように、サタンは主の面前から出ていったからである。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した身体がある。

しかし反対に。魂と身体から複合されたものはどれも霊とは呼ばれない。だから「イザヤ書」第31章［第3節］で言われるように、「エジプト人は人間であって神ではなく、彼らの馬も肉であって霊ではない」。しかるに、悪霊は霊と呼ばれており、「マタイによる福音書」第12章［第43節］に「不浄の霊（immundus spiritus）が人間から出ていった」云々とあることから明らかな通りである。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した身体はない。

2. さらに。悪霊と天使は同じ本性に属する。というのも、［偽］ディオニュシオスが『神名論』第4章［第23節］で言うように、「悪霊はつねに悪であるわけではないし本性的に悪であるわけでもなく、むしろ天使的な善の欠落によって悪である」からである。しかるに、天使は非物体的であり、彼が同章［第1節］で言う通りである。それゆえ、悪霊にも自身と本性的に合一した身体はない。

3. さらに。「マルコによる福音書」第5章［第9節］で言われるように、「お前の名は何と言うのか」と悪霊に問う主［イエス・キリスト］に対して、悪霊は「レギオン（legio）、われわれは大勢だから」と答えた。しかるに、ヒエロニュムスが『マタイによる福音書注解』［第4巻第26章第54節］で言うように、レギオンには6666の兵士が含まれる[20]。そしてもし悪霊が物体的だったとするなら、人間の一なる身体にそれだけ多くの悪霊が存在することは不可能だっただろう。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した身体はない。

4. さらに。ダマスケヌスが［『正統信仰論』］第2巻［第3章］で言うように、天使は「周囲を限定されたり、［場所に］囲まれたりせず、また壁や戸、門や封によって限界づけられえない」。しかるに、もし天使に自身と本性的に合一した身体があったとするなら門や戸で閉じ込められえただろう。というのも、複数の物体は同時に同じ場所には存在できないからである[21]。あるいは、もしそうしたことが天使の分割によって生じた

[18] cf. アリストテレス『形而上学』第5巻第8章（1016b32）、第7巻第7章（1034a8–10）。
[19] cf. アルベルトゥス『自然学注解』第1巻第2論考第4章。
[20] cf. リールのアラヌス『神学語彙集』「レギオン」の項目。
[21] cf. アリストテレス『自然学』第4巻第9章（213b20）。

とするなら、悪霊の死が帰結しただろう。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した身体はない。

解答。次のように言わねばならない。悪霊に自身と本性的に合一した身体があろうとなかろうと、これはキリスト教信仰の教義にとっては大して重要ではない。実際、アウグスティヌスが『神の国』第 21 巻［第 10 章第 1 節］で言うように、「学識ある人々（docti homines）が考えたように悪霊にも自らの何らかの身体があり、それは粗雑で湿った空気から出来ていて、風が吹くとそれの衝撃が感じられる。他方で悪霊には何らの身体もないと誰かが主張するとしたら、こうした事柄について面倒な詮索によって骨を折るべきでもなく頑固な討論によって争われるべきでもない」。それでもこの問題の真理が知られるためには、或る人々が物体的なものと非物体的なものについて、そして悪霊について何を考えていたと見出されるのかを考察せねばならない。

まず、諸事物について最初に探究し始めた或る人々は物体しか存在しないと見なした。これに当てはまるのは最初の自然学者たち（primi naturales）である[22]。彼らの見解から派生したのがマニ教徒たちの誤謬であって、マニ教徒らは神さえも何らかの物体的な光（lux corporea）だと措定した[23]。こうしたことが生じたのは、彼らが想像力を知性によって超越することができなかったことによる。ところで、何かが非物体的であることは知性の作用そのものから明白に証明される。［アリストテレスの］『魂について』第 3 巻［第 4 章 429a24–27］で証明されているように、知性の作用はいかなる物体の作用でもありえないはずだからである。

次にこうした見解が除外されると、或る人々は、たしかに非物体的な何かはあるが物体と合一しないようなものは全くないと措定した。だから彼らは神さえも世界霊魂（anima mundi）であると措定していたのであり、ウァローについてアウグスティヌスが『神の国』第 7 巻［第 6 章］で語る通りである。しかし、まずアナクサゴラスがこうした見解を除外したのであり、彼は万物を動かす普遍的な力（uirtus uniuersalis）に訴えた。万物を動かす知性は何ものとも混合していないのでなければならないと彼は措定している[24]。次にアリストテレスは運動の永続性に訴えた。その永続性は第一動者（primus motor）の無限な力によってのみ進行することができる。しかるに、無限な力は何らの大きさのうちにも存在しえない。それゆえ、『自然学』第 8 巻［第 10 章 267b17–19］で彼が結論づけるように、第一動者はあらゆる物体的な大きさを欠いている。他方でプラトンは抽象の道（via abstractionis）に訴えた。物体の理拠（ratio）なしに知解できる善と一は、物体なしに第一原理において自存すると彼は措定している[25]。

かくして第一原理としての神は物体でもなく物体と合一してもいないことが前提されると、或る人々は、このことはただ神にのみ固有であるのに対して、他の霊的実体は物体と合一していると措定した。だからオリゲネスが『諸原理について』第 1 巻［第 6

---

[22] cf. アリストテレス『形而上学』第 1 巻第 4 章（983b6–8）。
[23] cf. アウグスティヌス『異端について』第 46 章。
[24] cf. アリストテレス『自然学』第 8 巻第 9 章（256b24–27）（トマス『定期討論集 神の能力について』第 6 問第 6 項によれば）。
[25] cf. プロクロス『神学綱要』第 12 命題と第 13 命題。

章第 4 節］で言うように、「質料的実体なしにまた物体的な付け加えとの交わり（corporee adiectionis societas）も全くなく存在すると知解されることはただ神にのみ固有である」。しかし、この立場も明瞭な理由によって除外される。それは次の通りである。或るものとの結合が固有な理拠に即してではなくて別の何かに即して見出されるものはつねに、その或るものなしに見出される。たとえば、火は他の元素との混合（permixtio）なしに見出されるのであり、そうした混合が火の固有な理拠に属していない一方で、付帯性は実体なしには見出されない。なぜなら、まさに実体が付帯性の固有な理拠に属するからである[26]。しかるに、知性が物体と合一するのは知性が知性であるかぎりではなくて他の能力に即してであることは明白である。それゆえ、［神以外の］他の諸々の知性が物体から離在していることが見出されるのは明白である。他方で神は知性を超えている。

次にこのようにして物体的なものと非物体的なものについて見てきたので、悪霊に関しては次のように考察せねばならない。アリストテレスの学派である逍遥学派（Perypathetici）は悪霊が存在すると措定しなかったが、悪霊という属性を帰せられるものは天体や他の事物の力に由来すると言っていた。だからアウグスティヌスが『神の国』第 10 巻［第 11 章第 2 節］で言うように、ポルピュリオスはこう考えていた。「草木、石、動物や、何らか一定の音や言葉、形像（figuratio）や図形（figmentum）、また天の回転において観察される星々の何らかの運動によって、さまざまな結果をもたらすのに適した諸々の権能（potestas）を人間は製作する」。しかし、これは明白に偽だと思われる。なぜなら、悪霊による何らかの作用はどんな仕方でも自然の原因（causa naturalis）によって進行することができないものだからである。たとえば、悪霊に取りつかれた者は未知の言語を話す[27]。そして悪霊による他の多くの仕業が憑依術にも降霊術にも見出され、それらは何らかの知性によるのでなければどんな仕方でも進行することができない。

かくして他の哲学者も悪霊が存在することを措定するよう促された。彼らのなかではプロティノスが、アウグスティヌスが『神の国』第 9 巻［第 11 章］で語るように、「人間の魂はダイモン（demon）であり、善い報いがあるなら人間からラレスになる一方、悪い報いの場合はレムレスないしラルウァエになり、その人間に善い報いがあるのか悪い報いがあるのか不明な場合はマネスになると言った」[28]。だがクリュソストモスが『マタイによる福音書注解』［第 28 講話］で言うように、「ダイモンが墓から出てきて、死者の魂がダイモンになるという有害な教えを植え付けようとした。だから腸卜師の多くは子供を殺してその魂を協力者にしようとした［と彼らは言う］。だが、非物体的な力が他の実体に変移すること、すなわち魂がダイモンの実体に変移することがありうるということには理由がないし、また身体から離在する魂がここらを徘徊するのも理屈に合わない。というのも、義人の魂は神の手のうちにある一方で[29]、罪人の魂はただちにこ

[26] cf. アリストテレス『形而上学』第 5 巻第 22 章（1025a14）。
[27] cf. トマス『神学大全』第 1 部第 115 問第 5 項。
[28] 実際にアウグスティヌスが紹介しているのはアプレイウスであり、主な典拠としては『ソクラテスの神について』第 14 章が想定される。古代ローマにおいて「ラレス」（lares）は家庭の守護神であり、「レムレス」（lemures）ないし「ラルウァエ」（larvae）は悪さをする死者の霊、「マネス」（manes）も死者の霊を意味する。訳出に際しては便宜のため複数形をそのまま音写することとし、長音は音写に反映させなかった。
[29] 「知恵の書」第 3 章第 1 節。

こから引き離されるからである」[30]。

それゆえこうした見解が退けられると、他の人々は、アウグスティヌスが『神の国』第 8 巻［第 14 章第 1 節］で語るように、次のように措定した。「理性的魂がそのなかにある生き物はすべて、神々、人間、ダイモンの三つに分割される。彼らが言っていたのは、まず神々には天の身体（corpus celeste）があり、ダイモンには空気の身体が、人間には土の身体があるということである」。かくしてプラトンは身体から完全に離在する知性的実体より下に、身体と合一する実体のこうした三つの秩序を措定していた。

しかし、悪霊に関してはこの立場は不可能だと思われる。まず、第一の理由は次の通りである。空気は全体と部分とで類似した物体であるのだから[31]、もし空気の或る部分が魂をもつと措定されるなら、空気全体が魂をもつのでなければならないが、これが偽であることは明らかである。なぜなら、生命の作用は運動という仕方でも他の何かという仕方でも空気全体において全く捉えられないからである。第二の理由は次の通りである。魂をもつ下位の物体が何であれ器官的（organicus）であるのは[32]、魂のさまざまな作用のゆえである。しかるに、物体が器官的でありうるのは、それ自体で限界づけや形づけがされうる場合にかぎるが、こうしたことは空気には適合しない。それゆえ、空気の身体はいずれも魂をもつものではありえない。なぜなら特に、もしそれがそれ自体で限界づけられえないものだとするなら、周りを取り囲む空気から区別できなくなってしまうからである。第三の理由は次の通りである。形相が質料のためにあるわけではなくてむしろ逆であるのだから[33]、身体が特定の身体であるがゆえに魂が身体と合一しているのではない。むしろ何らかの魂の作用にとって必要だから、つまり感覚や何らかの運動のために身体は魂と合一している。しかるに、空気のいかなる部分の運動も事物の生成にとって必要ではない。或る人々が魂をもつと措定する天体の運動と同様ではない。だとするとそこから、霊的実体は空気の身体を動かすためにそれと合一してしまったはずである。それゆえ、こうしたことは主要には感覚のためであるということしかないのであり、それは私たちにおいてそうであるのと同様である。だからプラトン主義者たちも悪霊は心において受動すると措定した[34]。これは感覚的部分に属する。さて感覚は、あらゆる感覚の基礎[35]であるからこそそれが消滅すると動物が消滅してしまう触覚なしにはありえない。しかるに、［アリストテレスの］『魂について』［第 3 巻第 12 章 434a27–28］で証明されているように、触覚の器官は空気からなる物体でも他の単純な物体でもありえない。それゆえ、空気の身体はいずれも魂をもつものではありえないということしかない。かくして私たちは、悪霊には自身と本性的に合一した身体はないと主張する。

1. それゆえ、第一に対しては次のように言わねばならない。アウグスティヌスがそ

---

[30] cf. トマス『カテナ・アウレア』「マタイによる福音書」第 8 章第 28 節の注解。
[31] cf. アリストテレス『生成と消滅について』第 1 巻第 1 章（314a18–20）。
[32] cf. アリストテレス『魂について』第 2 巻第 1 章（412a28–b1）。
[33] cf. アリストテレス『自然学』第 2 巻第 4 章（194b8–9）、アヴェロエス『自然学大注解』第 2 巻第 26 注解。
[34] cf. アウグスティヌス『神の国』第 8 巻第 16 章、アプレイウス『ソクラテスの神について』。
[35] cf. アリストテレス『魂について』第 2 巻第 2 章（413b4–5）。

の箇所や他の多くの箇所で悪霊の身体について語るのは、学識のある何らかの人々、すなわちプラトン主義者たちから見てであり、それは上で［すなわち主文の冒頭部で］引き合いに出された彼の典拠から明らかな通りである。

2. 第二に対しては次のように言わねばならない。経験は固有には感覚に属する。というのも、知性はプラトン主義者たちが措定したように離存的な形相（forma separata）だけでなく[36]物体も認識するのではあるが、かといって知性が物体を認識するのは物体がここと今にあるかぎりにおいて、すなわち経験に固有なかぎりにおいてではなく、共通の理拠（ratio communis）に即してだからである。しかしながら、経験という名は知性的な認識に転用されるのであり、視覚や聴覚といった諸感覚の名そのものと同様である。とはいえ、アウグスティヌスが悪霊に経験を措定するのは、悪霊に身体があり、そこからの帰結として感覚もあるということが措定されるかぎりでのことだと主張するのを何も妨げない。

3. 第三に対しては次のように言わねばならない。多くの場面でプラトン主義の思想の追従者である［偽］ディオニュシオスが、プラトン主義者たちに同意して、悪霊とは感覚的な欲求と把捉をもつ何らかの生き物であると考えたのは十分にありうることではあるが、次のように言うこともできる。狂憤および欲情が悪霊に措定されるのは比喩的な仕方であり、作用の類似のゆえである。感覚的部分のなかで怒情的および欲情的な力に属する何らかの情念を含意しているわけではない。なぜなら、もしそうならそれらは聖なる天使たちにも措定されることになるからであり、アウグスティヌスが『神の国』第 9 巻［第 5 章］や［偽］ディオニュシオスが『天上位階論』第 2 章［第 4 節］で明らかにしている通りである。同様に表象力も、［アリストテレスの］『魂について』［第 3 巻第 3 章 429a3–4］で言われるように見るということから名を受け取ったのではあるが、悪霊には比喩的に適用されており、知性にも見るということが適用されるのと同様である。

4. 第四に対しては次のように言わねばならない。空気は土よりも高貴な物体ではあるが、空気も他のどの元素も質料として混合物体（corpus mixtum）と関わっている。だから混合物体の形相は元素の形相よりも高貴である。したがって、魂は形相のなかでも最も高貴であるのだから[37]、それは空気からなる物体の形相ではなくて混合物体の形相でしかありえない。混合物体においては土と水が量に即してより多く余計にあることで、混合の均等性が生じるようになっている[38]。

5. 第五に対しては次のように言わねばならない。魂が身体と関係づけられるのには二つの仕方がある。一方の仕方では魂は形相として関係づけられる。その場合、空気からなる物体である精気が魂と、土からなる混合物体との媒介であることはなく、無媒介に魂は形相として混合物体と合一している。もう一方の仕方では魂は動原（motor）とし

[36] cf. アリストテレス『形而上学』第 1 巻第 10 章（987b1–14）。
[37] cf. アリストテレス『魂について』第 1 巻第 5 章（410b14–15）。
[38] cf. ヘールズのアレクサンデルに帰される『神学大全』第 2-1 巻第 4 探求第 2 論考第 1 節第 3 問；ボナヴェントゥラ『命題集注解』第 2 巻第 17 区分第 2 項第 3 問；トマス『神学大全』第 1 部第 91 問第 1 項。

て魂をもつ物体と関係づけられる[39]。そしてこの関係づけにおいては、空気からなる物体、すなわち精気が魂と魂をもつ物体との媒介である。そして形相としての関わりの方が動原としての関わりに先行するのだから、土からなる混合物体の方が空気からなる物体よりも先行して魂をもちうるものであることが帰結する。

6. 第六に対しては次のように言わねばならない。もし何らかの人々が措定するように天体は魂をもつということが前提されるとしても[40]、だからといって中間の領域に魂をもつ物体がいる必要はない。というのも、混合（mixtio）によって中間の状態にもたらされた最下位の物体は、火や空気のように反対対立しているものの突出が存在している単純物体よりも反対対立から離れている点において天体との類似をより多くもつからである。

7. 第七に対しては次のように言わねばならない。この点に関してダマスケヌスがオリゲネスに追従した可能性はある。その場合にダマスケヌスは、天使にも悪霊にも自身と本性的に合一した身体があると信じていたことになる。それらが私たちとの関係づけのなかでは霊と呼ばれる一方で、神との関係づけのなかでは物体的だと呼ばれることがその理由だということになる。だが次のように言うこともできる。物体的なものがダマスケヌスと［大］グレゴリウスとによって複合体として受け取られている。その場合に彼らの言明によって理解されるのは、天使と悪霊は私たちとの関係づけのなかでは単純である一方で、神との関係づけのなかでは複合体であるということでしかない。

8. 第八に対しては次のように言わねばならない。その定義はプラトン主義者たちの立場に即して与えられている。

9. 第九に対しては次のように言わねばならない。アウグスティヌスもそこではプラトン主義者たちに即して語っている。だから彼は同所［『神の国』第 21 巻第 10 章第 1 節］で「学識ある人々が考えたように」と言った。

10. 第十に対しては次のように言わねばならない。アウグスティヌスはそこ［『神の国』第 8 巻第 16 章］でプラトン主義者たちに反論している。彼らは、神性への礼拝が永遠の身体のゆえに行われるべきだと措定していた。彼らに反論する際にアウグスティヌスは彼らの立場を用いており、次のことを示している。もし悪霊には不滅の身体があるなら、まさにそれゆえに悪霊は受動的な心をもつ場合よりもはるかに悲惨である。

11. 第十一に対しては次のように言わねばならない。アウグスティヌスはそこ［『神の国』第 11 巻第 23 章第 2 節］でオリゲネスに反論している。オリゲネスは、功徳の相異に応じて異なる霊がより高貴な身体やより高貴でない身体を受け取ったと措定していた。そしてそのかぎりでは、より大きな悪性が属する悪霊には人間よりも粗い身体がなければならなかっただろう。

12. 第十二に対しては次のように言わねばならない。魂には自身と本性的に合一した身体器官があり、それは自らの本性的な作用のために要求される。しかるに、人間に対

---

[39] cf. アリストテレス『魂について』第 2 巻第 4 章（415b8–12）。

[40] cf. アウグスティヌス『神の国』第 13 巻第 16 章第 2 節；マクロビウス『スキピオの夢注解』第 1 巻第 14 章第 8 節；アリストテレス『天界について』第 2 巻第 3 章（285a29）（トマス『対異教徒大全』第 2 巻第 70 章によれば）；ヒエロニュムス『コヘレトの言葉注解』第 1 章第 6 節（トマス『真理論』第 5 問第 9 項第 14 異論解答によれば）。

して姿を見せることは悪霊の本性的な作用ではなく、他のどの作用も身体器官が要求されるようなものではない。それゆえ、悪霊には自身と本性的に合一した身体がなくてもよい。

13. 第十三に対しては次のように言わねばならない。たしかに個々の善が一つの秩序に属しているかぎりは、善が多い方が少ない場合よりも善い。ただし一つのものにおいて自らの善性が完成している神のようなものは、自らの善性を異なる部分に応じて分散してもつものよりもはるかに善い。このかぎりで天使も、自らの本性に即して全体的に霊であるので、身体と霊から複合されている人間よりも善い。

14. 第十四に対しては次のように言わねばならない。もし天使や悪霊においてそれらが非物体的だと措定されるとするなら、知性と意志以外にはどんな能力も作用もない。だから［偽］ディオニュシオスが『神名論』第 4 章［第 1 節］で言うように、「それらの実体、力、作用はすべて知性的である」。理由は次の通りである。あらゆる事物の力および作用はそれの本性に随伴しなければならない。しかるに、天使は魂のように自らの部分に即して知性であるのではなく、自らの本性全体に即して知性的である。それゆえ、天使における力ないし能力はどれも知性的な把捉や欲求に属するものでしかありえない。さて、天使が少なくとも場所的な運動によって或る物体を意志の命令にのみ従って動かすことに不都合はない。というのも、人間の魂がただ知性と意志によって自身と合一した身体を動かしていることを私たちは見ているからである。しかるに、或る実体が知性的で高級であればあるほど、より広範に（universaliter）動かす力をもつ。それゆえ、身体から離在する知性的な実体は自身とは合一していない或る物体を意志の命令に従って動かすことができ、知性的な実体がより高級であればあるほどよりよく動かすことができるはずであり、或る天使たちの奉仕によっては天体さえも動かされると言われるほどである[41]。しかるに、形相の受け入れに関して物体的質料が御意のままに従順であるのは神にのみ固有なことである。

15. 第十五に対しては次のように言わねばならない。天使は自身とは離れた或る物体に対して無媒介にははたらきかけない。なぜなら、ダマスケヌスが［『正統信仰論』第 2 巻第 3 章および第 1 巻第 13 章で］言うように、天使は存在するところで作用するからである。だがやはり天使は、意志の命令にのみ従って場所的に動かす何らかの物体を用い、その物体の力が中間に拡散することで、一定の距離があっても作用する。それは、アウグスティヌスが『三位一体論』第 3 巻［第 8 章第 13 節］で言うように、天使が物体的事物の力を用いて何らかの物体的な効果をもたらすのと同様である。

16. 第十六に対しては次のように言わねばならない。アウグスティヌスはそうしたことを断言してはおらず疑いながら述べており、それは語り方そのものから明らかである。というのも、彼が『創世記逐語注解』第 12 巻［第 22 章第 48 節］で言うように、「どのようにしてこの見られているものは人間の霊にやってくるのか。それはそこではじめて形成されるのか、それとも形成されたものが運ばれて何らかの結合を介して見出されるのか。たとえば、天使は人間に対して自らの思念（cogitationes）と物体的事物の類似を示し、自らの霊においてその思念や類似を未来のことごとの認識によって前もって形成

[41] cf. トマス『神学大全』第 1 部第 110 問第 1 項および第 57 問第 2 項。

するのかといったことを知ることは困難でもあり、すでに知っていたとしても議論や説明を尽くすのが非常に厄介である」。しかるに、天使は自らが示している事物の類似を人間の想像力において形成するという前半部分の方はより真である一方で、天使がその類似を自らの霊において形成したうえで天使において形成された類似を人間の霊が見るということは理屈に合わないと思われる。

17. それゆえ、第十七に対する解答も明らかである。

18. 第十八に対しては次のように言わねばならない。諸次元の下にある質料は、一つの種に属する多数の個体が見出されるものにおける数的な区別の原理である。というのも、こうしたものは［種的］形相に即しては異ならないからである。だが天使においては種の区別は個体の区別でもある。なぜなら、天使においては一つの種に属する複数の個体が見出されないからであり、それは他のところで示した通りである[42]。

19. 第十九に対しては次のように言わねばならない。天使は物体的に場所に存在することはない。それゆえ、場所的な運動に属するものが一義的に天使と物体について言われるのでもない。

1. 他方で、反対異論のうちの第一に対しても次のように解答することができるはずである。もし誰かが悪霊には空気の身体があるということを支持したとしても、悪霊が私たちのようにその身体に従属するのではなくて、むしろその身体の方が悪霊に従属しているのであり、アウグスティヌスが『創世記逐語注解』［より正確には『三位一体論』第 3 巻第 1 章第 4 節］で言う通りである。だから悪霊は、自身と本性的に合一した身体をもっていても私たちよりはるかに霊（spiritus）であると言うことができる。なぜなら特に、空気そのものも精気（spiritus）だと呼ばれるからである。

2. 第二に対しては次のように言うことができる。［偽］ディオニュシオスはプラトン主義者たちも措定したように上位の天使が非物体的だということをとにかく主張していた。しかるに、彼が悪霊はその上位の天使ではなくて自身と本性的に合一した身体をもつ下位の天使に由来すると考えていたことはありうる。それゆえ、アウグスティヌスが『創世記逐語注解』第 3 巻［第 10 章第 14 節］で言うように、「私たちのなかには悪霊は天上のないし天上を超えた天使ではなかったと考える人もいる」。またダマスケヌスが［『正統信仰論』第 2 巻第 4 章で］言うように、悪霊の首領（princeps）は「地上の秩序を統轄していた」。

3. ［記述が欠けている］

4. 第四に対しては次のように言うことができる。空気は物体なので他の物体と同時に同じ場所に存在することはできないが、それにもかかわらず戸や門によって囲まれない。なぜなら、非常に細い裂け目を通って出ていくことができるからである。悪霊の身体についても同じように言うことができる。なぜなら特に、悪霊には自身と本性的に合一した大きな身体があると措定する必要がないからである[43]。

---

[42] cf. トマス『神学大全』第 1 部第 50 問第 4 項 ;『有と本質について』第 5 章 ;『霊的被造物について』第 8 項。

[43] 本稿は、JSPS 科研費 22K12965 の助成を受けたものである。

（いしだ・りゅうた　同志社大学文学部哲学科　助教）